

新しい歴史認識をめざして

— 盧泰敦著『古代朝鮮 三国統一戦争史』を読む —

黒田 洋子

はじめに

韓国ソウルにある国立中央博物館を訪れたことがあるだろうか。そこでは日本古代史の研究者であれば誰もが新羅・高句麗・百済の出土遺物、金石文などの文字史料、仏像などを直接目にして深く感銘を受け、朝鮮半島文化が日本に与えた影響を強く実感したはずである。

ところでこれらの展示品のキャプションに、「南北朝時代（統一新羅）」と表示されているものがある。これはいかなる意味をもつ時代表記であるのか。他国の歴史であるから、そこまで理解しなくてもよいと考える方もあるだろう。しかし少なくとも朝鮮半島出土の文字史料に関心を寄せるのであれば、このキャプションの意味を共有する輪の中にあるべきなのではないか。そして自国で築いた歴史認識のみで東アジアの歴史を語るには大きな限界があることを認識する必要があるのではないだろうか。

七世紀における日本の歴史を理解しようとする際、朝鮮半島情勢の理解は必要不可欠である。とは言うものの、その際日本の古代史研究者が

基本とする史料は『日本書紀』であろう。事実、それに基づいて対外交渉関係を論じた論文は枚挙に遑がない。本稿ではそこから一歩進んで、より広い視野での研究を目指して理解を深めるために、盧泰敦著『古代朝鮮 三国統一戦争史』^①を紹介しつつ問題提起を行いたいと思う。なお本書に関しては既に東洋史の立場から植田喜兵成智氏による書評があり、全体の内容構成と問題点が指摘されている。^②本稿では日本古代史から見た本書の重要性について考えてみることにする。

一、本書の特質

本書は第Ⅰ部と第Ⅱ部の二部から構成される。第Ⅰ部では本書の大前提となる、七世紀における新羅による「三国統一」という概念に対する理論的検討を行っている。それに対し、第Ⅱ部では、新羅による「三国統一」戦争の過程を様々な史料にもとづいて実証していく。

朝鮮半島における統一国家の成立をどの時期に求めるかについては古くから説の分かれるところである。しかし未だに統一的な見解が得られ

ていない。本書第Ⅰ部においては、最初に国家として統一したのを新羅と見るのか、あるいは高麗と見るのかについて、古くは『三国史記』や金石文に示された見解から始まり、朝鮮時代の『東国通鑑』『東国地理志』『東史綱目』などに見られる編纂者の認識、その後現在の研究動向や現代韓国人の間で広がっている歴史認識にいたるまで、全時代を通じて諸説が整理・紹介される。さらに韓国・北朝鮮の研究のみならず、中国や日本の研究までも論拠に触れつつ整理されている。

それらのうち、本書と関連するものとしても注目するべきところは、一八世紀朝鮮時代の柳得恭『渤海考』（一七八四）等から見られるようになった南北国論である。この南北国論では新羅による三国統一論に対し新羅を批判的に見て、新羅の領土的不完全性から渤海の登場を重視する立場がとられた。すなわち金氏による南方領有、大氏による北方領有・渤海成立の二つに対し、南北国と言う概念を用いるようになる。南北国論は、近代に入ってから民族主義と結合することにより、新羅統一論を批判してさらに二十世紀に継承された。ここでは、新羅が外国勢力と結託して同族を攻撃したことを、「反民族性」とみなして批判する。この南北国論の議論においては「民族」が核心テーマとなり、民族的道徳に立脚して、歴史の道徳化・理念化が推し進められ、それが民族主義史学の特性となってしまう。

近年の韓国の学界動向においても、渤海を民族史として位置づけて、新羅の統一を否定したり、あるいは制限的に認定したりする立場が見られる。また新羅による戦争の目的が百済の併合にあると見て、「新羅による統一」と言う概念をナンセンスと捉え、七世紀末以降の新羅に対し

て「後期新羅」という名称を用いる動きが韓国・北朝鮮を通じて見られるようになる。

一方この「後期新羅」論の中には、「統一」とは三国で一つの民族・一つの世界を形成していたことが前提となるとして、そこから新羅三国統一論を否定する説もある。

以上のように第Ⅰ部では、新羅三国統一論に対して否定的な立場を取る研究を網羅・整理し、その問題点を提示する。中でも朝鮮時代後期より見られた南北国論にはたいへん説得力があり、一見したところでは妥当性を持ち得ているようにも見える。

第Ⅱ部では、以上のような長い歴史を持ち、今なお学界を分けて論じられているテーマに対し、独自の視点と手法にもとづいて、新羅による三国統一を実証していく。すなわち『三国史記』・『新唐書』・『旧唐書』等の史書類・『日本書紀』など、韓国・中国・日本の史料を駆使して、統一戦争の過程を詳細に復原する。

ここでは高句麗・新羅・百済三国の内的要因の他に、中国における統一王朝の出現と東方への膨張という外的要因を明らかにし、二つの要因を重ね合わせて検証することによって、新羅による三国統一という概念の妥当性、すなわち一つの国家の成立を証明していく。

以上のように本書は問題点を理論的に明らかにした上で、新羅による統一国家の成立を実証することを試みる。すなわち理論と実証を組み合わせた手法と、戦争に焦点を当てた独自の実証方法によって、新羅による三国統一を証明した点に、本書の特質がある。

二、統一戦争の描写方法について

本書は今述べた手法のうち、実証面においては統一戦争の実態を様々な角度から論証していく。その際橋本繁氏・李成市氏が本書の訳者あとがきと解説で述べているように、対象とする空間のスケールが大きいことがまず指摘できる。当時の朝鮮半島情勢や統一戦争が、靺鞨・突厥・鐵勒・薛延陀・サマルカンド等、北方から中央アジアにかけて存在した様々な周辺諸民族との関連性の中で描かれている。これらの周辺諸民族に関しては日本史で扱う史料からは直接見えないため、我々からすると特徴が掴みにくい。こういった国際的な視野から統一戦争を捉えることで、本書は様々な外的要因を可視化し、客観的に捉えることを可能にしている。それによって読者はこのような空間的な広がり、後述するような近代にもつながる時間的な広がりという両軸方向の中で統一戦争を捉える視点を持つことができる。この点が多分に本書の醍醐味と言えよう。

また本書においては、戦争に携わった武将の動向については詳細に論じられているが、政治の中枢にいた人物の動向についてはあまり言及されていない。すなわち政治的な動向や経緯に戦争の要因を求めず、あくまで政治的要素を排除して、具体的な戦争の局面、すなわち物資補給のあり方や歩兵・騎兵の戦闘技術・城の攻守方法・遺民の実態など、実際に戦況を左右した要因から戦争の動向を描いている。それが本書の特徴の一つである。ここに戦争という紛れもない事実のみから歴史を構築することを試みる著者の意気込みが感じられる。

また戦争の具体的な描写方法をみると、編纂史料を中心に、墓誌銘などの金石文にいたるまで事実確認を行い、手堅い作業に基づいて行軍日程や戦況を描き出す。そして対立関係にある各軍の行程を地理的に詳細に復原していく。それによって戦争においては季節や気象条件、地形といった自然条件が重要な要素であった点が明確に論証される。気候や地形などの自然的要因が歴史を左右するという点で、歴史における環境の役割をあらためて痛感させられる。

統一戦争の舞台となった朝鮮半島はこの時期、戦況により領域支配関係が頻繁に変化する。そのため支配領域が複雑に入り組んで、「犬の牙のように複雑な」領土関係を呈することになる。³⁾

この点に関して日本古代史との関連を指摘しておきたい。この時期の朝鮮半島における領域支配の変遷を正確に理解することは、日本古代史を解明する上で、もはや欠かせない。たとえば朝鮮半島と日本の出土文字史料について、両者の比較・考察をする際、その字面のみに注目しても正確な理解は望めない。出土地点の时期的支配状況を理解してこそ、その史料の価値を十分に引き出すことが可能となる。また日本古代史の研究者が依拠する史料の一つに太宰府天満宮所蔵の『翰苑』がある。これについても、そこに引用される『高麗記』とともに本書に示される具体的な成立の経緯や背景を正確に理解しておく必要がある。単に読み下された校釈本を利用して字面のみの研究を行うのは、きわめて不十分と言えよう。

そして何よりも、本書で示された多方面から分析された統一戦争の経緯を理解することなしには、『日本書紀』を正確に理解することは不可

能なのではないだろうか。たとえば小学館の新編日本古典文学全集四、『日本書紀』第三卷（一九九八年初版）、天智十年の記事の頭注には「新羅による百済旧領の侵略」と言った表現がしばしば見られる（二九〇～二九一頁）。そこでは『三国史記』文武王十一年正月条に見える「発兵侵百済、戦於熊津南」という記事が根拠として示される。しかし実際には、この時の新羅軍の攻撃は唐軍に対して行われたものであり、本書を讀めば事実と異なることは明らかである。誤解の背景には百済記等、百済系渡来人の観点が影響していることもあるかもしれない。こういった点からも、今後我々が何を学び、どのように認識するべきなのかを再考するべき時がきているのではないだろうか。

三、本書におけるもう一つの特徴

一方、本書のもう一つの特徴として、古代日本の新羅に対する態度を近代における韓日関係を投影させながら捉えている点が挙げられる。この点に関する盧泰敦氏の見解は、『第二期・日韓歴史共同研究報告書・第一分科会篇』に収録された二〇〇九年八月に行われた座談会においても明確に示されている。⁴すなわち本書において日本と新羅の関係を「同床異夢」とみる見解が、同座談会においても貫かれている。

すなわち盧泰敦氏から、

- ①白村江における新羅の役割に対する理解不足・低評価、
- ②八世紀中盤における新羅と日本の外交的摩擦・断交に連なる状況に対する理解、

③仏教文化の両国の様相、

④律令と律令文化・律令体制、

などの具体的な歴史事象に関して指摘があったのに続き、

⑤新羅を他者化、新羅を日本より下位にある実態として認識し、古代日本の相対的優位性を確固たるものにしようとする認識が（日本側の研究に）見られ、こういった側面は近代史学のある時期に、日本の史学において強調していた重要な特性の一つであること、

⑥中央集権国家の整理した資料と近代国家の定立の際に通用していた歴史認識の二つから離れる必要があること、

などの指摘があった。この中で盧泰敦氏は、

「今後はこのように古代韓国と日本の相互間で相手を他者化し、自らのアイデンティティを強調しようとする立場を脱し、東アジア地域歴史圏という側面からより相互の同質性と差異性に対して認識を図っていくという方向に向かつていかなければならないのではないかと考えています。古代韓日関係史に対する理解の深まりは、究極的には両国民の間の相互理解増進にその目的があります。」

と述べている。盧泰敦氏は上記の⑤に関連してさらに、「七世紀末以降に日本で成立する史料の解釈に対し、近代の日本史学における倭についての何らかの歴史認識もまた作用しているという点は無視できません。」

とし、「近代初期に見られた歴史認識の影響から脱しなければならぬ」とことを強調し、脱するための具体的方法とともに模索するべきである、と提案している。

以上のように同座談会においては、当該期における歴史認識の相違が浮き彫りにされた。⁵⁾

先の引用箇所に見える「他者化・相対化」というのは日本における「相対的優位性を確固たるものにしようとする認識」を指すと思われるが、この点におそらく最も両国間に認識の相違があり、共通の歴史認識の構築を困難にさせていると考えられる。今後、この点についても議論が深まることを期待しつつ、以下に私見を述べる。

まず第一点目。少なくとも現在我々の周辺には、他国に対して故意に日本の優越性を確認しようとするような研究者はいない。しかし先述した『日本書紀』の頭注のように、書かれていることを事実と解釈し、事実とは異なる認識をしていることが我々の中にも関わらず、それに気づかずにいるのも事実である。それゆえに「他者を相対化すること」で日本の優越性を確認する」と言う指摘は、我々日本の研究者に対して盧泰敦氏から発せられた警鐘として受け止めるべき言葉である。

それは過去に近代朝鮮総督府において、日本人によって、『日本書紀』にもとづく誤った隣国の歴史が構築された事実を、我々は忘れてはならないからである。史料が勝手に解釈されて歴史が捏造されたり、気づかぬうちに巧妙に事実と異なる歴史が形成されたりして自国の正統性の根拠として利用されることのないよう、我々は常に既成観念と闘いながら実証的な歴史研究を行わなければならない。誤った歴史認識を決して容認するわけにはいかなのである。

第二点目。本書の中には以上に述べたことと関連して、『日本書紀』の編纂方針に言及し、百済人と日本の天皇制の関係性について説明した

部分がある。少々長くなるが、以下に引用しておく。

「白村江の戦い以降、亡命した彼らの日本での生活は、たとえ専門家としての能力に対する高い評価が大きな力となったとはいえ、根本的に日本の朝廷の配慮に頼ってなされた。日本の皇室に寄生して明日の暮らを立てていくほかないのが、彼らのもつ宿命であった。彼らは、百済復興と故国復帰を望んだが、自力で具体化する力量はなかった。彼らがこれを熱望すればするほど、実現の可能性は、日本勢力の朝鮮半島への介入に見出すほかなかったのである。彼らは、日本の朝廷が朝鮮半島への関心を維持するように深く注意を傾けたであろうし、このために朝鮮半島が早い時期から日本の天皇家に従属したという歴史像の構築に積極的になり出した。彼らが、百済存立当時の百済と倭、そして倭と加耶や新羅との関係史を振り返って整理記述する時に取った立場の大きな枠組みは推測できる。いわゆる百済三書は、彼らの叙述であるが、彼らの手を経て修正されたものと考えられ、そうした著述は『日本書紀』の内容構成に大きく作用した。また、『日本書紀』は、その後の日本人の対外意識、特に対朝鮮認識に大きな影響を及ぼした。白村江の戦いで流された百済人と倭人の血の呪いは、千数百年過ぎた今日まで作用して、韓日両国人の間の葛藤を焚きつけている。いまやその呪いから逃れねばならない。」
(本書第Ⅱ部第2章161頁)

以上のような本書に見られる叙述は、日韓共同報告における盧泰敦氏の発言の具体的論点の一つと思われる。すなわち『日本書紀』における朝鮮半島認識が、近代日本史学や今日の日本人に至るまで、直接作用しているという。

この盧泰敦氏の見解には、若干論理の飛躍がある。盧泰敦氏が指摘する近代日本における自国を優位と見る歴史観とは、主として皇国史観との関わりの中から形成されたものである。すなわち『日本書紀』の編纂以降近代に至るまで、一三〇〇年以上にわたる日本の歴史の中で、皇国史観は中世の神皇正統思想や近世の国学などを通じて、徐々に神道崇拜や国粹主義に巧妙に取り込まれ融合されながらより堅固に形成され続けた。すなわち近代日本の皇国史観は『日本書紀』を根拠としながら、実は『日本書紀』を巧みに利用して歴史を歪曲化した上に成立したものである。

このような歪曲化した近代の歴史認識を、単に『日本書紀』の編纂者の意図に投影するだけでは、近代日本の歴史認識の誤りを解明することはできない。

盧泰敦氏が指摘するように『日本書紀』自体にも事実とは異なる記述、すなわち事実を潤色したり操作したりした記述があるのも事実である。

こう言った記述に関しては、これ自体の性格を明らかにする必要がある。それとは別個に、その後いかなる過程を経て『日本書紀』を根拠にして、歴史が捏造されてきたかを明らかにする必要がある。捏造された歴史や、歪曲化した思想が『日本書紀』を根拠にしているからと言って、『日本書紀』に全ての責任を負わせることはできないのではないか。それは「令和」という年号が、単に『万葉集』からの造語にすぎないにもかかわらず、『万葉集』にもともと存在した語であるかのように、『万葉集』を典拠として利用するのと同じである。あるいは先に述べた『日本書紀』の頭注の誤りは注釈を付した現代人の誤りであって、『日本書紀』

の編者の誤りではない。これらはいずれも史料を利用した人間に責任があるのであって、史料やその編者に責任があるわけではない。あくまでも誤りの根源を求めらば、その利用主体に求めるべきである。したがって近代日本の朝鮮半島認識の責任をすべて『日本書紀』に負わせるのではなく、誤りの所在を明らかにするためには、日本の全時代にわたって、『日本書紀』を利用して捏造・歪曲してきた実態を明らかにする必要がある。そしてそれらを積み上げた上で検証していかなければならない問題であろう。

四、新たな模索にむけて

奈良・平安時代以降、政治的には朝鮮半島認識が両国の間に暗い影を落とす一方、社会においては朝鮮半島から海を越えてもたらされた到来物は「高麗物」と呼ばれ、人々の間で珍重され続けた。

盧泰敦氏は先述した日韓共同報告の中で文化交流、特に仏教文化の様相の重要性について言及されている。特に東大寺の大仏開眼に先行する華嚴経講説を主導した、「新羅学生」審詳については盧泰敦・坂上康俊両氏とも両国の仏教文化交流を示す代表的な例としてその名を挙げている。審詳の死後、生前所持していた書籍を収めた櫃は、光明皇后発願の五月一日経を入れた櫃と相並んで東大寺で大切に保管され、貴重なテキストとして活用されていたことが正倉院文書の中に記録されている。あるいは正倉院文書の中では新羅系渡来氏族の活躍を追うこともできる。こう言った例を日本側の研究者が提示して、編纂史料に見える政治外交

の姿とは異なる新羅と日本の関係を検証し、提示していくことも必要であるし可能であろう。正倉院文書の中に残る両国の関係を知る手がかりは、新羅村落文書や佐波理文書だけではないのである。今後こう言った方面の研究が進展することに大いに期待したい。

最後に本書の中で感銘したことに触れておく。本書は、百済が新羅との最後の決戦に挑む際、百済軍を率いた階伯が、妻子を殺して出陣したことや両国の若い少年花郎を「散華」させることで自国兵士の士気を鼓舞したことに触れている。こうした行為に対し、朝鮮時代の儒者権近は階伯を「無道狂悖」と批判した。一方『東国通鑑』の編者は権近とは対照的に階伯に肯定的な意見を述べる。⁶⁾

若者が戦争で落とさなくともよい命を落とすことについて、ふと歌舞伎の演目で源平合戦の折熊谷直実が、天皇の血筋を引く敵の若武者敦盛の代わりに、自分の息子小次郎の首を差し出す場面を思い出す。⁶⁾これは十八世紀に書かれたフィクションであるが、今でも人気のある演目である。これこそ「無道狂悖」な行為以外の何ものでもない。

自らの所属する百済や新羅軍の士気を高めるため、あるいは自らの名を挙げるための犠牲と、芝居とは言え天皇の名の下に強いられる犠牲とでは、同じ若者の犠牲であっても根本的に質が異なる問題である。しかし若者の死に対してまさしく「無道狂悖」であるにもかかわらず父親直実の行為が理解され続ける点に、近代日本を戦争へ導いた精神構造の特質が如実に表れている。

ちなみに権近は、階伯が妻子を殺したことを非難しているが、敵の若きホープ官昌を捉えたにも関わらず、階伯が殺さずに返してやったこと

を「古の名将の遺風」として評価している。官昌は再び敵地に向かい落命するが、それに対して権近は、「未冠の童をして単騎再往せしむは、其の子の必ず死して忍ぶを欲するなり。以て後世を訓すべからず」と断じている。戦争による若者の落命を強要したり美化したりすることは、いかなる名分があろうともあつてはならない。儒者権近の言葉を、我々は深く胸に刻むべきであろう。

おわりに

本書に対しては、橋本繁氏による日本語の良訳本があるにも関わらず、植田氏の書評を除いて日本の国内で書評が見られない。それは三節で触れた盧泰敦氏の指摘に対して、容易に触れるべき問題ではないとして敬遠されてきたからだと思う。敬遠されるのは、耳が痛い問題として認識されていることの証でもある。盧泰敦氏が言われるように、共通認識と理解を目指す時がきていることは多くの研究者が認識している。そのために我々日本古代史の研究者ができることはそれぞれの専門領域において、実証的な研究を目指すこと、そして今後、両国の架け橋となる若い研究者を育成することであると考えている。

註

(1) 橋本繁訳、岩波書店、二〇一二年。

(2) 書評「盧泰敦著（橋本繁訳）『古代朝鮮 三國統一戦争史』」（早稲田大学文学部東洋史研究室『史滴』三五号、二〇一三年一月）

(3) 本書二十八頁。『三国史記』卷第三十四、雜誌第三、地理一、あるいは永徽二年「義慈王書簡」(『旧唐書』百濟列伝)、などに見える。

(4) 日韓歴史共同研究委員会、二〇一〇年三月。同委員会は二〇〇五年六月二〇日の日韓首脳会談によって設立が合意され、二〇〇七年六月二三日に発足した。第一分科会は「日韓両国における古代の日韓関係史の学説と解釈の現状と問題点を共同で調査・研究すること」を目的としたものであった。

(5) ①から⑥に関する議論の中で、日本側の参加者である、森公章・濱田耕策・坂上康俊氏から①から④の個別事項に関しては具体的に反論あるいは補足説明がなされたものの、⑤・⑥に関しては、それ以上に日本側からの反論が提出されたり、両国で議論した記録がない。

(6) 『東国通鑑』巻七、義慈王十八年条。

(7) 『二谷嫩軍記』熊谷陣屋』。並木宗輔作。宝暦元(一七五二)年初演。

(A5版、三〇八頁、岩波書店、二〇一二年、本体価格四五〇〇円+税)

(くろだ・ようこ 奈良女子大学古代学聖地学研究センター協力研究員)

〔謝辞〕 本稿はJSPS科研費JP一七K〇三〇六七の助成を受けたものである。